

## 曲げをうける鋼 I 形断面の塑性限界幅厚比に関する研究

長野工業高等専門学校	学生員	中村 成太
	学生員	荻原 崇宏
	学生員	斉慶 将敏
	正会員	永藤 壽宮

### 1. 目的

現在の道路橋示方書を力学条項の拠り所としている『鋼構造物設計指針』は、鋼構造一般の設計に用いるので、道路橋以外の構造物には安全側に偏ってしまう傾向にありいかに述べる規定については修正を必要としている。

- 1) 断面構造要素の幅厚比に関しては、塑性設計限界幅厚比、塑性限界幅厚比及び、降伏限界幅厚比の規定。
- 2) 部材座屈に関する細長比に対しては、塑性設計限界細長比と塑性限界細長比の規定ただし塑性限界細長比は、中厚肉断面部材にたいしては、降伏限界細長比とする。

そこで、本研究では、3次元弾性有限変位プログラムを用いた数値解析により現行の許容応力度設計法において強度の基準となっている初期降伏強度から終局強度までの挙動特性を明らかにし、各種の部材が終局強度にたいして、一様な安全性を確保できるように力学条項を整えるとともに必要な板要素の幅厚比の塑性限界について、断面積比や板厚を一定としてその数値モデルを選択した。

### 2. 解析モデルの選定

骨組構造物の構造区分は部材断面の局部座屈に関する幅厚比パラメータと部材の細長比パラメータに応じて分けられる。下記に最も詳細な構造区分を模式的に表している。各区分に対して適用される構造解析法及び強度照査法をまとめると以下の通りである。

領域 1: 極厚肉断面のストックキナ部材により構成された構造で、塑性解析(塑性設計法)の適用可能な領域。

領域 2: 厚肉断面のストックキナ部材により構成された構造で、構造解析は弾性解析によるが断面の塑性強度について照査する。

領域 3: 厚肉断面のスレンダーな部材に構成された構造で、安定照査式と塑性断面強度について照査する。構造解析は弾性解析による。

領域 4: 中厚肉断面のストックキナ部材で構成された構造物で、断面強度は降伏強度にとる。構造解析は弾性解析による。

領域 5: 中厚肉断面のスレンダーな部材で構成された構造物で、部材の強度については安定照査式と降伏強度で照査する。構造解析は弾性解析による。

領域 6: 薄肉断面のストックキナ部材で構成された構造物で、局部座屈強度を照査する。構造解析は弾性解析による。

領域 7: 薄肉部材のスレンダーな部材で構成された構造物で、部材座屈と局部座屈の連成強度を照査する。構造解析は弾性強度による。

断面構成板要素の限界幅厚比として塑性設計限界幅厚比、塑性限界幅厚比及び降伏限界幅厚比の3種類を規定することになる。その際に本研究では板要素間の相互拘束効果を考慮して断面としての限界幅厚比を与えると考えた。曲げを受けるI形断面の限界幅厚比として代表的設計基準の塑性限界のフランジの幅厚比パラメータ  $p_f$  ウェブの幅厚比パラメータ  $p_w$  を平面上に描くと図-1 のようになる。板要素の個々に限界幅厚比を与えると長方形の領域で断面強度の区分が表せる。

計画したモデルの幅厚比パラメータの範囲は、ほぼ全ての設計基準塑性限界幅厚比の範囲を包含するように決定した。また、発表時の記号における  $L$  は道路橋示方書で規定されている横倒れ座屈強度限界の  $1/2$  の長さ

( $L=2.25b$ ) またはウェブ高 ( $L=H$ ) とし断面強度の低いほうを用いた。極限強度に大きな影響を与える要因のひとつである (フランジの断面積 :  $A_r$  とウェブの断面積 :  $A_w$ ) フランジとウェブの断面積比およびフランジ幅 :  $b$  とウェブ高 :  $h$  のアスペクト比のふたつがあげられる。

**3. 解析における仮定**

材料特性は SS400 を使用し、表-1 に示すデータを用いる。このデータは、種々の材料試験結果をもとに実測値に近いデータを用いた。

1) 応力-ひずみ関係

ひずみ硬化を考慮した 3次元有限変位プログラムを用いる際、ひずみ硬化域での応力-ひずみ関係をどの様に考えるかが問題である。本研究では既存の図-2 に示すような指数関数をひずみ硬化域での応力-ひずみ関係に用いた。

2) 初期不整

残留応力および初期たわみの最大値は溶接 I 形断面の実測データの平均値を用いた。また初期たわみの波形は、圧縮フランジは直線に、引張りフランジは初期たわみを無しとし、ウェブは一端固定、他端単純支持のはりの座屈モードと同じ波形とした。非線型方程式の解法においては、本研究では、修正ニュートン・ラプソン法を用いた。

このプログラムの解析結果の信頼性について永藤・小林の過去における実験データを実際に計算しており、実測値に近いデータが得られている。

E	G	$\nu$	$\sigma_y$	B
2.10E06	8.10E05	0.3	2.85E03	0.4876
n	$\epsilon_h$	$\epsilon_t$	$k_f$	$k_w$
0.268	0.0211	0.211	0.425	23.9

**4. 解析結果と考察**

断面積は、変化させないで  $b/h$  の比率だけを変化させて計算し、求められた  $M/M_p$  の値から  $M/M_p = 1.0$  の近似線を描く。

図-3 は研究の途中経過で市販の I 形鋼のデータをプロットしたものである。詳細は発表日に譲る。

**参考文献**

- ・ 奈良 敬：面内力を受ける鋼板及び補鋼板の極限強度に関する研究, 1986
- ・ 中沢俊彦, 山口 哲：曲げを受ける鋼型断面の降伏限界幅厚比に関する研究, 1993.3
- ・ 西村宣男, 奈良 敬：鋼構造部材および要素の塑性強度の有効利用に関する研究, 1991.3
- ・ 永藤 壽宮 他：曲げを受ける鋼 I 形断面の塑性限界幅厚比に関する研究, 鋼構造年次論文報告集 13 巻, 2005.10

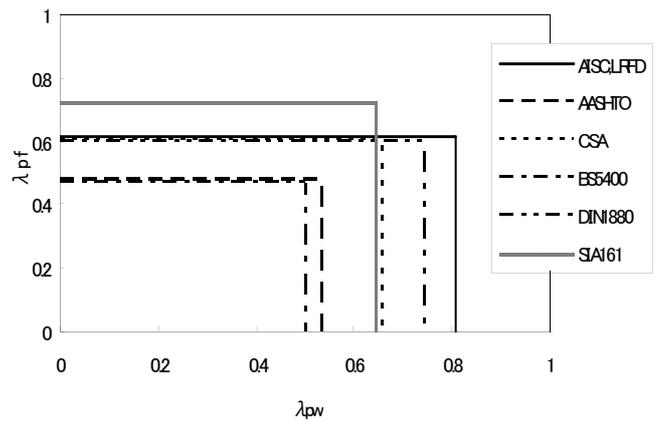


図-1 代表的設計基準の塑性限界

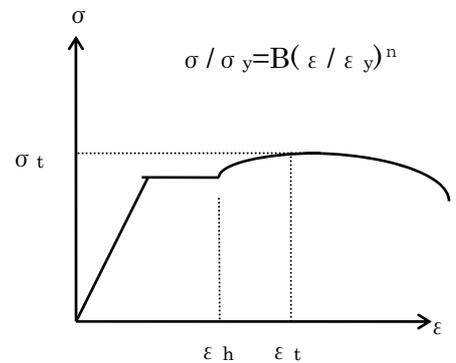


図-2 応力ひずみ関係図

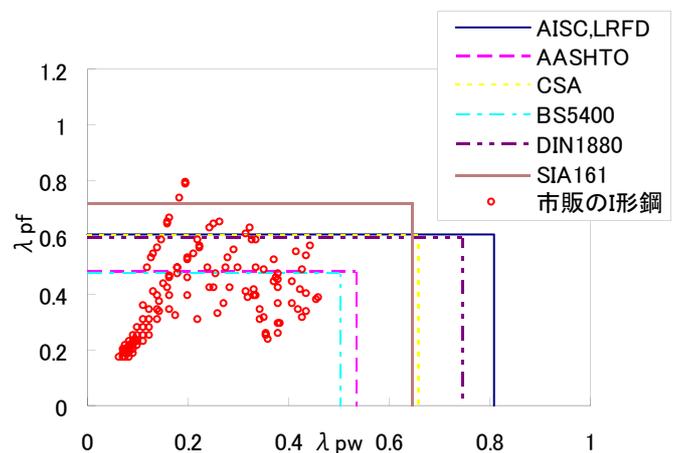


図-3 市販の I 形鋼